

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和4年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第10号（1月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

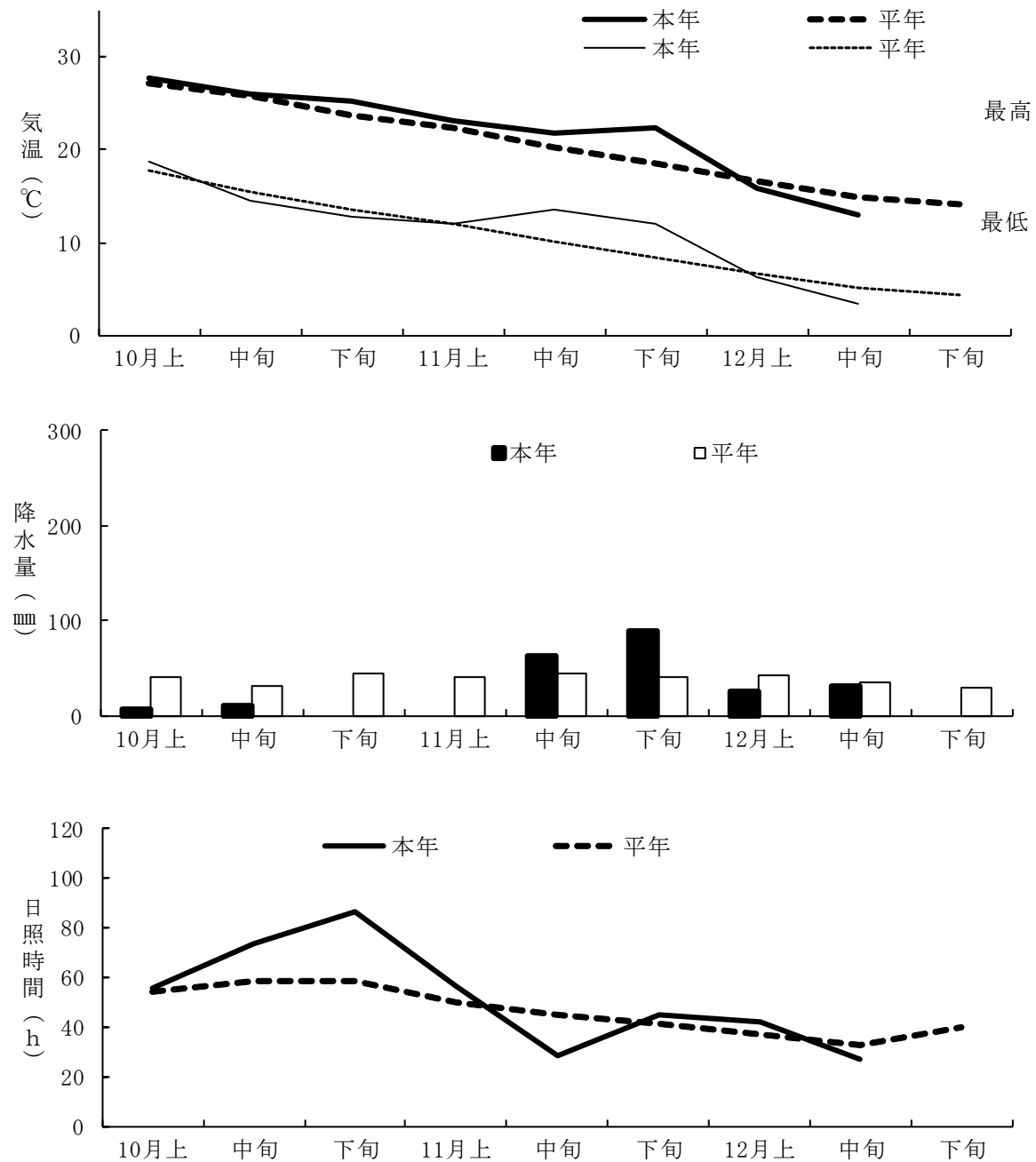
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（12月24日から1月23日） 令和4年12月22日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（%）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	60	30	10	九州南部の気温は平年より低く、降水量は少なく、日照時間は平年並みか多い見込み。奄美地方の気温は平年より低く、降水量と日照時間は平年並みか少ない見込み。
	奄美地方	50	30	20	
降水量	九州南部	50	30	20	
	奄美地方	40	40	20	
日照時間	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	40	40	20	

II. 10~12月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野 菜	キュウリ	べと病	やや少	やや少
		退緑黄化病	多	多
	ピーマン	斑点病	並	並
		アザミウマ類	やや多	やや多
	イチゴ	アザミウマ類	多	多
		ハダニ類	やや多	やや多
	施設野菜共通	うどんこ病	並	並
		菌核病	やや多	やや多
	キャベツ	菌核病	やや少	やや少
	エンドウ類	うどんこ病	多	多
アザミウマ類		やや多	やや多	
バレイショ	疫 病（熊毛地域）	多	多	
	” （奄美地域）	並	並	
花 き	キ ク	ハダニ類（県本土，施設）	やや多	やや多
		アザミウマ類（県本土，施設）	並	並

【病害虫発生予報】

I. 普通作物

防除に関する今月の留意事項

1. 水稻

(1) スクミリンゴガイ

早期水稻、普通期水稻でともに増加しており、以下の防除対策に取り組む。

ア 発生ほ場では2月までの極寒期に、トラクターでほ場を耕耘（走行速度を遅く、ロータリーの回転は速くする）して、土壌中の貝を寒風にさらすとともに破碎する。

イ 用水路内での越冬場所をなくし、水田への貝の侵入を減少させるため、水路での泥上げや除草に努める。

2. サツマイモ

(1) サツマイモ基腐病

次作の発病リスクを軽減するために、以下の防除対策を徹底する。

<育苗床>

ア 土壌消毒後は、耕耘を兼ねてガス抜きを十分に行う。

イ 育苗床では、萌芽の確認や育苗管理及び採苗作業で繰り返し出入りするなど、再汚染のリスクが極めて高いため、育苗床専用の長靴や手袋などを使用する。

ウ 萌芽した芽に変色やしおれ症状が見られた場合は、直ちに種いもごと抜き取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。また、萌芽せずに腐敗した種いもも掘り取り、同様に処分する。

<種いも伏せ込み>

ア 罹病した種いもが同一コンテナ内に混入すると、貯蔵中に健全な種いもへ伝染するため、定期的に種いもの状況を観察し、疑わしい種いもは必ず除去する。

イ 貯蔵前に種いも消毒を行っていない場合は、伏せ込む前に必ず種いも消毒を行う。また、病害発生いもや傷の多いいもなどの除去を徹底し、健全な種いものみを土壌消毒した苗床に伏せ込む。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県 (https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20221018104909-1.pdf)、農研機構 (https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator03.pdf) をご覧ください。



鹿児島県
サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第3版)
令和4年10月改訂



農研機構
サツマイモ基腐病の
発生生態と防除対策
(令和3年度版)

Ⅱ. 野 菜

1. キュウリ

(1) ベと病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

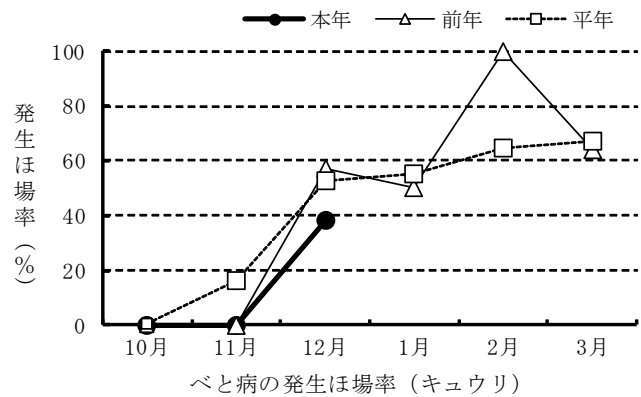
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率38%（平年53%）

：やや低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウスの通風換気に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (ウ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、早めに防除する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) 退緑黄化病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率54%（平年15%）：高い（＋）

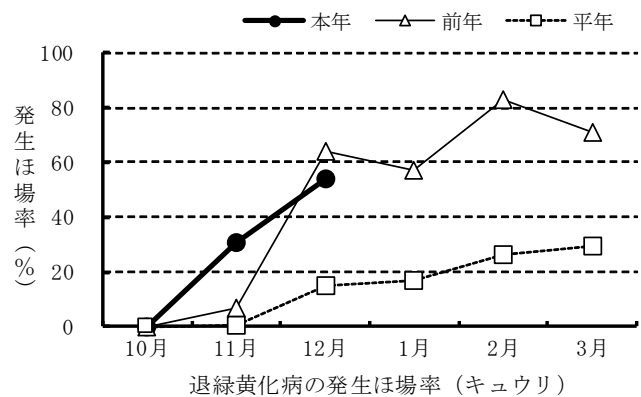
コナジラミ類の

発生ほ場率23%（平年13%）

：やや高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 退緑黄化病の病原ウイルスはタバココナジラミが媒介するので、施設内に黄色粘着トラップを設置し早期発見、早期防除に努める。
- (イ) 発病株を認めたら速やかに除去し、ハウス外に持ち出して適切に処分するか、ビニール袋等に入れて処分する。
- (ウ) 発病後は発生拡大を防ぐため、タバココナジラミの密度を抑えるように薬剤防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

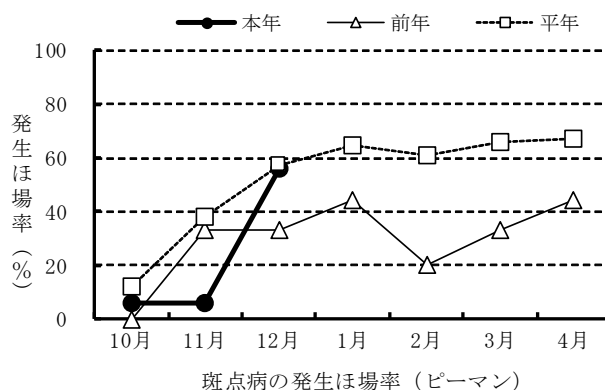
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率56%（平年57%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

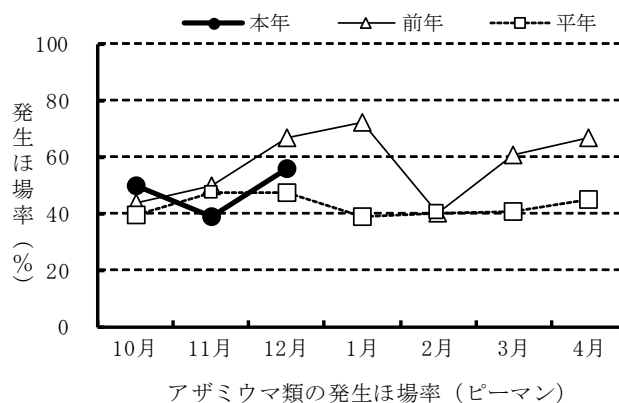
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率56%（平年47%）：並
発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 施設内に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 本虫は花や新芽の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (ウ) カブリダニ類などの天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (オ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。



3. イチゴ

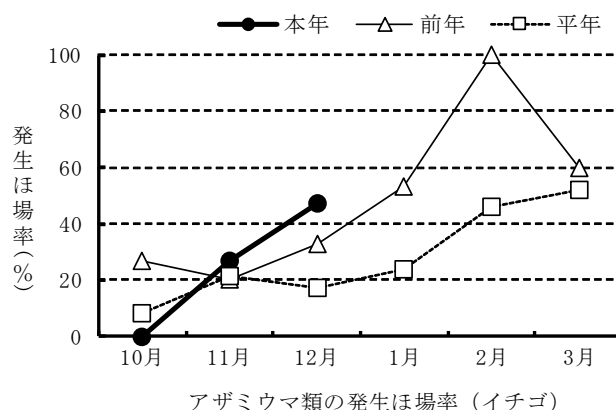
(1) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率47%（平年17%）：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 施設内に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 本虫は花や新芽の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (ウ) カブリダニ類などの天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響のない薬剤を選択する。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (オ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。

(2) ハダニ類 (令和4年度技術情報第9号 (11月29日付け) 参照)

ア 予報内容

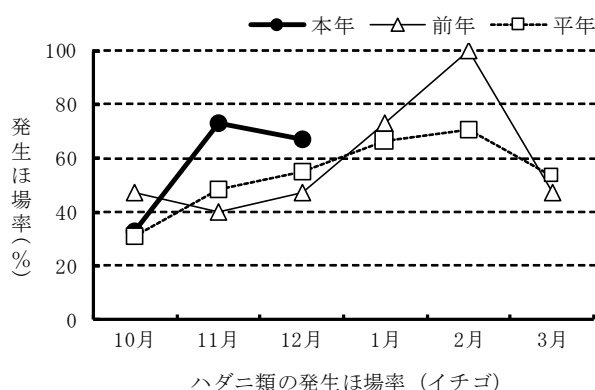
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率67% (平年55%)：並
発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。
- (イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。
- (ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているのので、散布後は防除効果を確認する。
- (エ) カブリダニ等の天敵を放飼しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (カ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。



4. 施設野菜共通

(1) うどんこ病

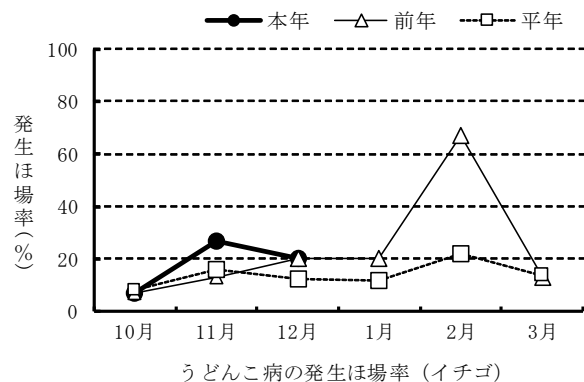
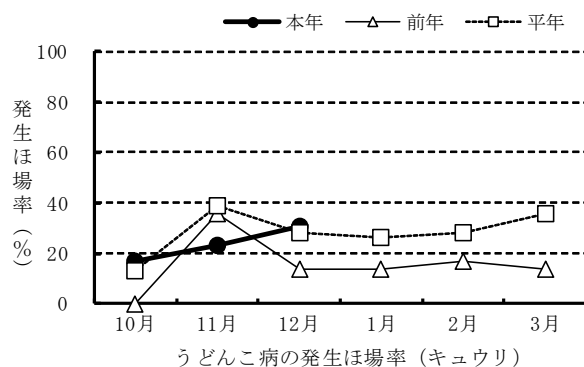
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ, メロン, ピーマン, トマト, ミニトマト, イチゴ
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並

作物名	発生ほ場率 (%)		概評
	本年	平年	
キュウリ	31	28	並
トマト	8	21	やや少
ピーマン	11	30	やや少
イチゴ	20	12	やや多



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(2) 菌核病 (令和4年度技術情報第10号 (12月23日付け) 参照)

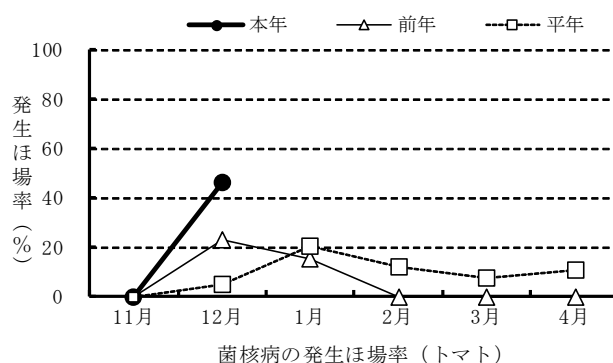
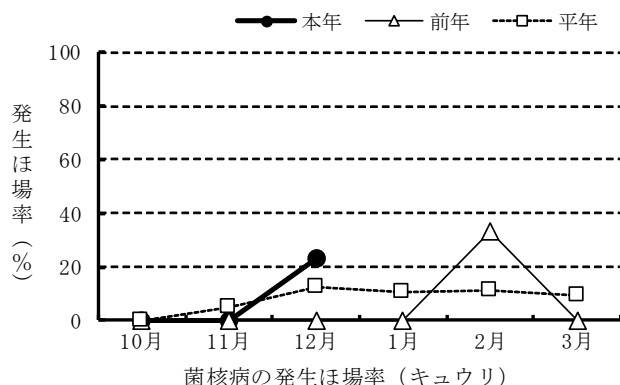
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ, メロン,
トマト, ミニトマト,
ピーマン, ナス, イチ
ゴ, サヤインゲン
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量: やや多

作物名	発生ほ場率(%)		概評
	本年	平年	
キュウリ	23	12	やや多
トマト	46	5	多
ピーマン	0	4	やや少
イチゴ	0	0	並



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病に注意し予防散布に努める。
- (ウ) 病原菌は活力の衰えた花びらや枯葉、整枝後の傷口、枝分岐部付近から感染しやすいので、薬剤は対象部位へ十分かかる様に散布する。
- (エ) 発病部位から健全部へ菌糸によって被害が広がるので、発病した花弁、枝葉、果実等は直ちに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- (オ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し、適正に処分する。
- (カ) 適切な肥培管理により植物体が過繁茂にならないようにする。
- (キ) 収穫終了後の残さは適正に処分する。

5. キャベツ

(1) 菌核病

ア 予報内容

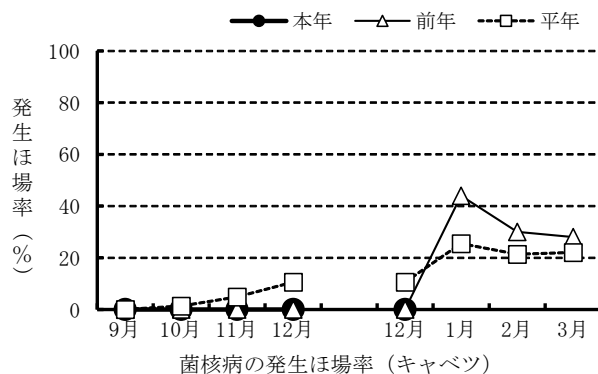
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 冬どり・春どり
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率0%（平年11%）
：やや低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件で発生しやすいので、天候に注意し、予防散布に努める。
- (イ) 病原菌は地際部から感染しやすいので、薬剤は株元へ十分かかるように散布する。
- (ウ) 発病部位から健全部へ菌糸によって被害が広がるので、発病葉は見つけ次第取り除く。
- (エ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し処分する。
- (オ) 収穫終了後の残さは適正に処分する。特に発病残さをほ場に残さない。



6. エンドウ類

(1) うどんこ病

ア 予報内容

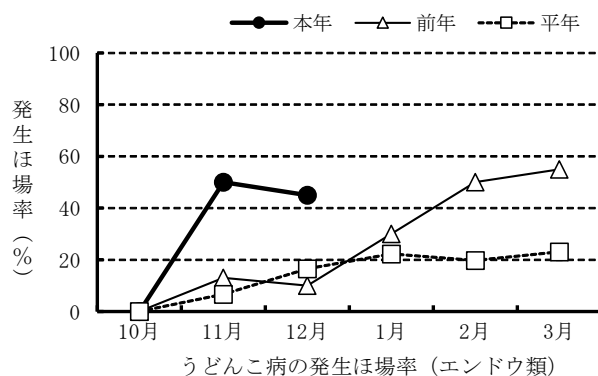
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率45%（平年16%）：高い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) かん水不足や着莢負担等による草勢低下で発生しやすいため、適正な管理に努める。
- (イ) 初期防除に努め、下位葉の葉裏まで薬剤が十分かかるように散布する。
- (ウ) 多発ほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

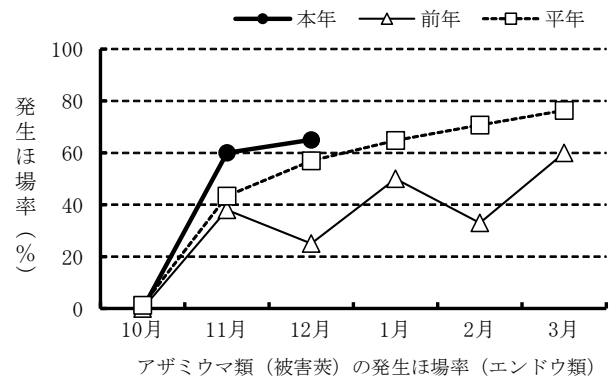
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率65%（平年57%）：並
発生程度の高いほ場を認めた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類は若莢に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、早期防除に努める。
- (イ) 薬剤のかかりにくい花卉の奥や若莢に寄生するので、丁寧な薬剤散布に努める。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



7. バレイシヨ

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 熊毛地域, 奄美地域
- (イ) 発生量 熊毛地域：多
奄美地域：並

イ 予報の根拠

<熊毛地域>

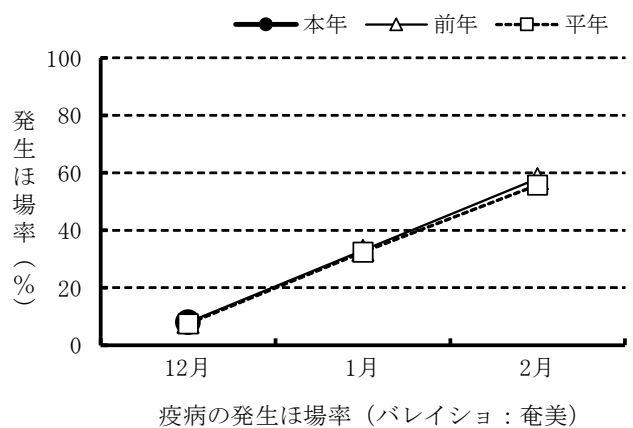
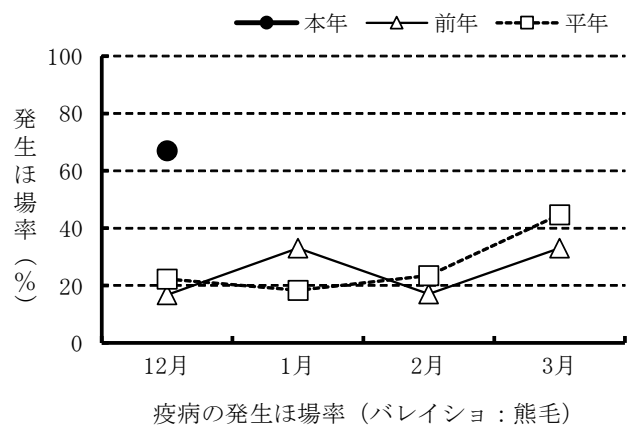
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率67%（過去4年17%）
：高い（+）

<奄美地域>

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率8%（平年8%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 降雨が数日続く等の土壤水分が高い条件下では、急速に病勢が拡大し、ほ場全体にまん延する。防除は予防散布に重点をおき、適期を逃さないように注意する。
- (イ) すでに発生のあるほ場では、治療効果のある薬剤を速やかに散布する。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (エ) 収穫が遅れると被害拡大につながるため、適期収穫を行う。
- (オ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適正に処分する。



防除に関する今月の留意事項

1. エンドウ類のごま症対策

スナップエンドウの「ごま症」は、うどんこ病菌及び褐紋・褐斑病菌が原因で引き起こされる。防除の遅れ・被害拡大とならないように、以下の点を考慮して防除対策に努める。

- (1) うどんこ病及び褐紋・褐斑病が未発生のは場では早期発見に努め、既に発生しているは場では早めに防除を行う。
(2) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

III. 花き (キク)

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土 (施設)

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

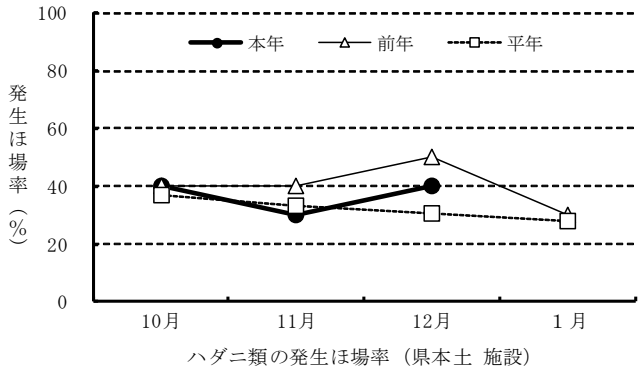
(ア) 調査結果 発生量: やや多

発生ほ場率40% (平年31%)

: やや高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。
(イ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。
(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
(エ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土 (施設)

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量: 並

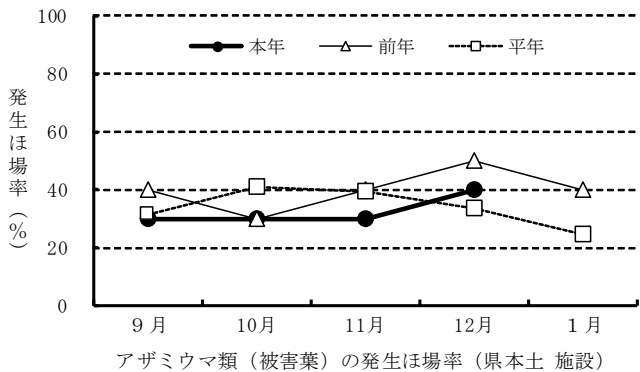
発生ほ場率40% (平年34%): 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンキイロアザミウマ等一部のア

ザミウマ類はキクえそ病 (TSWV) とキク茎えそ病 (CSNV) を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

- (イ) 発生動向を把握するためには、施設内に青色粘着シートを設置する。
(ウ) アザミウマ類は、種によって薬剤に対する感受性が異なるので、薬剤の選定に注意する。
(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
(オ) ミカンキイロアザミウマは上位葉に、クロゲハナアザミウマは中下位葉に寄生しているため、薬剤は株全体にかかるよう丁寧に散布する。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。